

Title	中国語におけるNP構造と α 移動をめぐって
Sub Title	On NP-structure and α -movement in Chinese
Author	田島, 英一 (Tajima, Eiichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1988
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.52, (1988. 1) ,p.275- 254
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岩崎英二郎教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00520001-0134

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中国語における NP 構造と α 移動をめぐって

田島英一

0.0 英語においては、動詞・形容詞とその名詞化形とが、しばしば同一の名詞句を同一の位置で下位範疇化 (Subcategorization) する。EST 以降の生成文法は、この構造的な類似性を X バー理論 (X-bar Theory) によって説明しようとした。X バー理論の基本概念を図示すると、次のようになる。

$$(1) \quad X^2 \rightarrow \alpha X^1 \alpha \quad X^1 \rightarrow \beta X^0 \beta$$

注...X は任意の語彙範疇を、 α, β は任意の最大投射要素を表す。

ある句構造の中で中心になる語 (X^0) を、主要部 (Head) と呼ぶ。主要部によって下位範疇化される要素 (β) は補部 (Complement) と呼ばれ、この補部と主要部とによって一次投射 (X^1) が形成される。更に一次投射は、指定部 (Specifier): 図式中の α を伴って二次投射 (X^2) を形成する。二次投射は X の最大限の投射であるため、X の最大投射 (Maximal Projection) とも呼ばれる。時に X^2 を「XP」もしくは「X''」、 X^1 を「X'」とも表記する¹⁾。次の (3) は、(2) の X バー構造 (D 構造) である。

(2) a. John has refused the offer. (ジョンはその申し出を拒否した。)

b. John's refusal of the offer. (ジョンによるその申し出の拒否)

(3) a. [_{VP} e [_{V_i} [_{V₀} refuse] the offer]]

b. [_{NP} John [_{N_i} [_{N₀} refusal] the offer]]

無標的な場合 (in the unmarked case), 一言語内において各語彙範疇は

同一の補部構造を持つ。こうして、(2a, b)の構造上の平行性が説明される。

ところが中国語においては、名詞句と動詞句が、明らかに非平行的な X バー構造を有している。例えば、動詞句では補部が主要部の後に位置するが、名詞句では、指定部と補部とを問わず、ほとんどの修飾成分が主要部の前に置かれる。従って、(4b)のような表現は許容されない²⁾。

(4) a. 約翰反对了這個建議。(ジョンはその意見に反対した。)

b. *約翰的反对這個建議。(ジョンによるその意見への反対)

つまり中国語は、句構造に関する限り有標 (marked) と考えられるわけである。従って、中国語の名詞句 (NP) 構造を考える場合、動詞句との平行性を手掛かりにすることはできない。あくまでも他範疇の句構造とは切り離し、名詞句それ自体の意味機能、移動変形 (α -Movement) との関係等に着目しつつ、名詞句の構造を明らかにしてゆく必要がある。

本稿は、中国語北方方言と上海方言の資料に基づき、中国語の NP 構造について考察するものである³⁾。

0.1 あらゆる科学は、仮説の検証作業という性格を持つ。従って、言語研究においても、あらかじめ採用される仮説ないし理論の基本的枠組みが示されていなければならない。そこで、まず始めに、本稿で採用する諸原理について、概述しておくことにしよう。

Chomsky (1986b) では、統率 (Government) に関する条件として、最小条件 (Minimality Condition) が提案された。最小条件は、概ね次のように定義される。

(5) 最小条件: β が主要部 δ の補部要素であり、 δ の投射要素 γ が α を除外する (exclude) 場合、 γ は α - β 間の統率関係を阻む障壁 (Barrier) となる。

言い方を換えれば、最小条件は、主要部以外の要素による補部要素の統率を禁じていることになる。例えば、次の名詞句補部 (Tom) は、see による統率を受けない。

(6) they saw [_{NP} Bill's [_{N_i} picture of Tom]] (Chomsky 1986b, p. 43
(彼等は、ビルが撮ったトムの写真を見た。) より)

この場合、picture が (5) の δ に、NP 及び N^1 結節点が γ に相当する。従って、二つの障壁 (NP, N^1) が存在することになり、see (= α) による名詞句補部への統率は成立しない。ところが次の例では、 N^1 が障壁にならないかのように見える。

- (7) a. the city's destruction (中島 1987, p. 117 より)
 b. [_{NP} the city_i [_{N¹} destruction t_i]]

上の the city は、元来 NP 補部に基底生成された要素で、移動変形により NP 指定部内へと代入されたものである。t_i はその痕跡 (Trace) を表す。次の空範疇原理 (ECP) によれば、痕跡 t_i は先行詞 the city による統率を受けていなければならない。

- (8) ECP: 痕跡は先行詞統率されていなければならない。

ところが、 N^1 が (5) に従って障壁を形成すると仮定した場合、痕跡 t_i は先行詞による統率を受けられなくなり、事実と反して (7) が非文であることを予測してしまう。そこで本稿では、 θ 領域 (θ -Area) という概念を通して、最小条件の定義に若干の修正を施してみたい。

- (9) θ 領域: 主要部 δ の投射要素であり、項 (argument) ではないような最大の範疇 γ が存在する場合、 γ を δ の θ 領域という。
 (10) 最小 θ 領域 (Minimal θ -Area): α を支配する最も小さな θ 領域を、 α の最小 θ 領域という。

これらの定義を明確にするために、(11) の図式を用いよう。

- (11) ... [_{X¹} ... X⁰ ... [_{Y¹} ZP [_{Y⁰} ... Y⁰ ...]]]

X^1 は、主要部 X^0 の θ 領域である。もしここで YP が X^0 の項でなかったなら、主要部 Y^0 の θ 領域は YP になる。またこの場合、YP が ZP を支配しているから、ZP の最小 θ 領域は YP になる。これに対して、YP が X^0 の項であった場合には、 Y^1 が Y^0 の θ 領域になる。この場合には、 X^0 の θ 領域である X^1 が、ZP の最小 θ 領域になる。

θ 領域とは、主要部が θ 付与を行う領域を、言い換えたものに過ぎない。英語では (そして中国語でも)、主要部による θ 付与は、一般に補部

要素に対してのみ行われる。しかし主要部が I であり、しかも IP が定形節であった場合、I は IP 指定部(主語)にも θ 付与を行う。これは、IP の姉妹結節点である C が、語彙範疇ではない(つまり IP は項ではない)ためであると考えられる。もし IP が語彙範疇から θ 付与を受け、項となっていれば、I の θ 領域は I¹ になり、IP 指定部は I による θ 付与を受けない(この場合、主語は VP からの間接 θ 付与を受ける)。事実、CP 削除 (CP-deletion) によって IP が上位節の V の項となる場合、その IP は不定形節でなければならない。これは、不定形節が定形節とは異なり、I による主語への θ 付与を行わないからである。更に我々は、統率と最小条件とを次のように定義する。

(12) 統率: α が β を M 統御し、 β にとって障壁で、かつ α を除外するような結節点 γ が存在しない場合に限り、 α は β を統率する⁴⁾。

(13) 最小条件: α にとっての最小 θ 領域が β であり、その β を支配する (dominate) か被覆するような結節点 γ ($\neq \beta$) が存在する場合、 γ は α にとって障壁になる。

(6) においても (7) においても、NP は V の項であり、N の θ 領域は N¹ になる。そこで、(7) の痕跡 t_1 を支配する最小の θ 領域も N¹ ということになるが、その N¹ を支配もしくは被覆し、かつ先行詞 the city を除外するような結節点は存在しない。よって、先行詞は痕跡を統率し、ECP が満たされる。これに対して (7) では、Tom を支配する最小の θ 領域 (=N¹) を支配し、同時に see を除外するような結節点 (=NP) が存在する。従って Tom は、see による統率を受けないわけである。

1.0 英語においては、CNPC 効果と呼ばれる言語現象が観察される。CNPC とは、移動変形に課せられた条件であり、関係節からの要素の抽出を禁ずる。

(14) *Who are you reading a book that criticises? (Radford 1981, p. 232 より)

(誰を批評した本を、君は読んでいるのか?)

(14) では、WH 句が関係節内から抽出され、母句の CP 指定部に移動しているため、CNPC 違反で非文になる。ところが中国語では、同様の移動が排除されない。

(15) 你最喜歡 [NP 誰画的画兒]

俺最歡喜 [NP 唸人画個画] <S>⁵⁾

(君は誰の描いた絵が一番好きか?)

(15) はいずれも WH 疑問文として解釈され、LF では誰 / 唸人 (who) が CP 指定部に上昇しているものと考えられる。ここで、中国語の関係節が N の項であると仮定しよう⁶⁾。(16) は (15) の LF であり、 t_3 , t_2 , t_1 , t_0 は誰 / 唸人の痕跡を表す。

(16) 誰 [IP 你最 [VP t_3 [VP 喜歡 [NP t_2 [N₁ [CP t_1 [IP t_0 画]] 画兒]]]]]

唸人 [IP 俺最 [VP t_3 [VP 歡喜 [NP t_2 [N₁ [CP t_1 [IP t_0 画]] 画]]]]]

(16) では、すべての痕跡が先行詞統率を受けている。まず、 t_0 から見てみよう。 t_0 にとっての最小 θ 領域は IP であり、その IP を支配もしくは被覆しかつ t_1 を除外するような結節点は存在しない (C が空である場合、C¹ は削除される。Chomsky 1986b, p. 48 参照)。従って、 t_0 は先行詞 t_1 によって統率される。また、関係節 CP は N の項であるため、C の θ 領域になりえない。従って、 t_1 にとっての最小 θ 領域は N¹ になる。この N¹ を支配もしくは被覆しかつ t_2 を除外するような結節点は存在しない。よって、 t_1 は先行詞 t_2 により統率される。更に、 t_2 にとっての最小 θ 領域は VP であり (I は非語彙範疇であるから、VP は項にはならない)、その VP を支配もしくは被覆しかつ先行詞 t_3 を除外するような結節点は存在しない。そこで t_2 もまた先行詞統率を受ける。最後に t_3 であるが、 t_3 は VP の付加要素 (adjunct) であるため、VP に支配されない。従って、 t_3 の最小 θ 領域は IP になる。この IP を支配もしくは被覆しかつ誰 / 唸人を除外するような結節点は存在しない。故に、 t_3 もまた先行詞統率を受けるわけである。結果として、チェーン (誰 / 唸人, t_3 , t_2 , t_1 , t_0) は、完全に ECP を満たすことになる。

それでは、なぜ (14) が許容されないのでしょうか。結論から先に言っ

てしまえば、英語の関係節が N^1 の姉妹結節点であり、項ではないからである (中島 1987, p. 118 参照)。次は、(14) の S 構造を表す⁷⁾。

(17) . . . reading [_{NP} t₂ [_{N₁} [_{N₁} a book] [_{CP} t₁ [_{C₁} that criticises t₀]]]

この場合、関係節 CP が t_1 の最小 θ 領域になる。その CP が N^1 によって被覆され、しかも N^1 が先行詞 t_2 を除外するために、 t_1 は先行詞統率を受けることができず、ECP 違反で非文になる⁸⁾。

もし CNPC 効果を下接の条件 (Subjacency Condition) によるものだと考えると、我々には (14) と (15) の文法性の違いを説明できなくなってしまう⁹⁾。しかし、ECP の帰結であると考えてることによって、この両者の違いが説明可能になるのである。

1.1 以上、中国語では関係節からの WH 句摘出が可能であることを見たが、すべての WH 句が摘出可能だというわけではない。怎麼 / 哪能 (how), 為什麼 / 為啥 (why) 等の副詞的 WH 句は、次の (18b, c) のように関係節から摘出できない。

- (18) a. 你現在找 [_{NP} 什麼時候写的信]
 儂現在找 [_{NP} 啥辰光写個信] <S>
 (君は今、いつ書いた手紙を探しているのか?)
- b. *你現在找 [_{NP} 怎麼写的信]
 *儂現在找 [_{NP} 哪能写個信] <S>
 (君は今、どのように書いた手紙を探しているのか?)
- c. *你現在找 [_{NP} 為什麼写的信]
 *儂現在找 [_{NP} 為啥写個信] <S>
 (君は今、なぜ書いた手紙を探しているのか?)

興味深いのは、同じ副詞的な機能を果たしている什麼時候 / 啥辰光 (when) が、LF において母句 CP の指定部にまで上昇しているという点である (そうでなければ、18a の文は WH 疑問文として容認可能にならない)。この事実から考えて、(18) 各文の文法性の判定を左右しているのは、副詞的な要素が統語構造に占める位置ではなく、それぞれの副詞的 WH 句が持つ統語的素性そのものだけということになる。

してみると、Huang (1982) で主張された WH 句の分類には、確かにうなずける点がある。彼は、[±Objectual] という素性によって、WH 句を二種類に分けた。誰 / 嗚人や什麼 / 嗚 (what) のような名詞的な WH 句は [+Objectual] という素性を持ち、広作用域数量表現 (Wide Scope Quantifier) となる。一方、この素性についてマイナスの値を持つ WH 句は狭作用域数量表現 (Narrow Scope Quantifier) であり、怎麼 / 哪能や為什麼 / 為什麼 がこれに相当する。狭作用域数量表現はその移動に際して「下接の条件」による制限を受けるが、広作用域数量表現はこの条件の対象にならない。この提案を受け入れることによって、(18) の各文の文法性の違いは、説明可能になる。

しかし我々は 1.0 において、誰 / 嗚人 を広作用域数量表現と見なすまでもなく、(15) のような文の文法性を正しく予測することに成功した。それではなぜ、(18b, c) が容認されないのであろうか。この問題を検討する前に、まず、移動変形 一般に課せられる条件について考えてみよう。次の諸条件は、Chomsky (1986b, p. 4-6) からの引用である。

(19) a. 代入 (substitution) について

- ① 補部への移動はできない。
- ② 主要部への移動できるのは、 X^0 要素に限られる。
- ③ 指定部へ移動できるのは、XP 要素に限られる。
- ④ X^0 要素と XP 要素だけが、 α 移動に対して可視的 (visible) である。

b. 付加 (adjunction) について

付加は、項ではない XP 要素に対してのみ行われる。

(19) は、 θ 基準 (θ -Criterion) や構造保持の仮説 (Structure Preserving Hypothesis) の帰結として導かれたものである。我々は更に、投射原理 (Projection Principle) の帰結として、代入変形に関する第五の条件を導入しよう。

(20) 代入変形は、すべての統語的レベルにおいて、統語素性との間に矛盾をきたしてはならない。

厳密下位範疇化規則 (Strict Subcategorization Rule) や 選択規則 (Selectional Rule) が導入する 統語素性 (Syntactic Feature) は、元来基底部門での語彙挿入に際して機能するよう定められていた (Chomsky 1965, 第二章参照)。しかし投射原則は、こうして導入された統語素性が、統語部門や LF 部門でも守られることを要求するはずである。例えば、IP 指定部に基底生成される要素は (文主語を唯一の例外として) 名詞句に限られるが、統語部門で IP 指定部への代入が行われる場合 (受動化変形、繰り上げ変形等) であっても、名詞句以外の要素を代入することはできない。これは、指定部として NP を要求する I の統語素性が、統語部門においても保持されていることを示している。

ここで、NP 指定部として基底生成される要素について考えてみよう。英語の名詞句では、名詞や指示代名詞のような名詞性の語彙項目が指定部として現れる。この点、中国語も変わらない (中国語の NP 指定部については後述する)。英語においても中国語においても、N の統語素性は指定部として名詞的な要素を要求するということなのだろう。従って、怎麼 / 哪能 や 為什麼 / 為什麼 のような副詞的な要素は、当然 NP 指定部に代入できなくなる。また NP は項なので、(19b) により NP への付加もありえない。そこでこれらの副詞的 WH 句は、関係節 CP の指定部から、直接母句 VP へと付加されることになる。次は、(18b) の LF である。

- (21) 怎麼 [_{IP} 你現在 [_{VP} t₂ [_{VP} 找 [_{NF} [_{CP} t₁ [_{IP} t₀ 写]] 信]]]]
 哪能 [_{IP} 儂現在 [_{VP} t₂ [_{VP} 找 [_{NF} [_{CP} t₁ [_{IP} t₀ 写]] 信]]]] <S>

CP が信の項であるため、痕跡 t₁ の最小 θ 領域は N¹ になる。そして、この N¹ を支配すると同時に t₂ を除外するような結節点が、二つ (NP, V¹) 存在する¹⁰⁾。従って t₁ は t₂ による先行詞統率を受けることができず、ECP 違反で非文になる。

これに対して、(18a) の 什麼時候 / 啥辰光 は、文中で副詞的に機能しているものの、元来が名詞句である (時候 / 辰光 は「時」という意味の名詞)。そこで、NP 指定部への代入が可能になり、(15) の 誰 / 啥人 同様、母句 CP の指定部へと上昇するわけである。

1.2 Huang (1982) では、特定性条件 (Specificity Condition) によって、次の (22b) (23b) が排除されると主張されている。特定性条件は、特定された NP、つまり名前 (name)・代名詞を主要部とする NP や、指示詞を伴った NP 等が、自由変項 (WH 句痕跡等) を含むことを禁ずる。

(22) a. 誰買的书最好?

(誰の買った本が一番よいのか?)

b. *誰買的那本书最好?

(誰の買ったその本が一番よいのか?)

(23) a. 愛看什麼的小孩真没出息?

(何を喜んで見ているような子供は全く出世しないのか?)

b. *愛看什麼的小明真没出息?

(何を喜んで見ているような明ちゃんは全く出世しないのか?)

加えて Huang は、特定性条件が論理上の矛盾に由来するものであり、文法の中で述べる必要はないと主張している。しかし我々はここで、特定性条件のもたらす効果を、統語構造に依存する文法現象としてとらえなおしてみたい。次の (24) はいずれも非文である。

(24) a. *你最喜歡 [NP 張誰画的画兒]

*儂最歡喜 [NP 張啥人画個画] <S>

(君は誰の描いた絵が一番好きか?)

b. *你最喜歡 [NP 一張誰画的画兒]

*儂最歡喜 [NP 一張啥人画個画] <S>

(君は一枚の誰の描いた絵が一番好きか?)

c. *你最喜歡 [NP 那張誰画的画兒]

*儂最歡喜 [NP 伊張啥人画個画] <S>

(君はその誰の描いた絵が一番好きか?)

(24) の NP は、(15) と異なり量詞(張), 数詞(一), 指示詞(那 / 伊)を伴っている。ここで、これらの語彙項目が NP 指定部に基底生成されるものと仮定しよう。すると、既にこれらの要素で満たされている NP 指

定部には WH 句を代入することができなくなり、関係節 CP 指定部から母句 VP に直接付加せざるをえなくなる。結果、関係節 CP 指定部内の痕跡は、(21) の t_1 同様先行詞統率を受けることができなくなり、ECP 違反で排除される。

関係節と、量詞、数詞、指示詞の語順が逆になっていても、話者の判定は変わらない。

- (25) a. *你最喜歡 [NP 誰画的張画兒]
 *儂最歡喜 [NP 啥人画個張画] <S>
 (君は誰の描いた絵が一番好きか?)
- b. *你最喜歡 [NP 誰画的一張画兒]
 *儂最歡喜 [NP 啥人画個一張画] <S>
 (君は誰の描いた一枚の絵が一番好きか?)
- c. *你最喜歡 [NP 誰画的那張画兒]
 *儂最歡喜 [NP 啥人画個伊張画] <S>
 (君は誰の描いたその絵が一番好きか?)

指定部要素よりも外側に位置する関係節は、NP の付加要素であるとして考えられない。従って、(25a) の LF は次のようになるはずである。

- (26) 誰 [IP 你最 [VP t_2 [VP 喜歡 [NP [CP t_1 [IP t_0 画]] [NP 張画兒]]]]]
 啥人 [IP 儂最 [VP t_2 [VP 歡喜 [NP [CP t_1 [IP t_0 画]] [NP 張画]]]]] <S>

NP の付加要素として基底生成された関係節 CP は、当然 N の項にはならない。よって、痕跡 t_1 の最小 θ 領域は関係節 CP になる。その CP を支配し、かつ先行詞 t_2 を除外するような結節点 (V^1) が存在するため、 t_1 は先行詞統率を受けることができなくなる。結果として、ECP の違反が起り、非文となる。(25b, c) (22b) も、同じ理由で非文となる。

それでは、なぜ (23b) が許容されないのでしょうか。一般に小明(明ちゃん)のような「名前」は、付加要素としての関係節を伴うことはあっても、補部要素や指定部要素を伴うことがない。例えば、「あの田中角栄は…」という時のあのは、「かの有名な」とか「今話題の」とかいった意味の強調表現であって、指示詞(指定部要素)の用法としては破格に近い。

また、「中国出了個毛沢東（中国に毛沢東という人が現れた）」などという表現もあるが、ここでの毛沢東は、毛沢東その人を指し示す名前として用いられているわけではなく、「毛沢東という人」という意味の一般名詞として用いられているのである。そのため、量詞の個（指定部要素）を伴うことが可能となっているのであって、これも破格の表現だと言わなければならない。同様のことは、代名詞についても言える。そこで、次のように考えることができるだろう。

- (27) 名前、代名詞はそれ自体で NP を形成し、補部要素や指定部要素を伴わない。

従って、(23b) の関係節は、補部要素ではなく付加要素だということになる。付加要素であれば、(22b) や (25) の場合と同じ理由で排除できるわけである。

2.0 移動変形が行われた後、移動された要素とその痕跡との間にはチェーン (Chain) が形成される。一般に一つのチェーンは、 θ 基準の要求によって一つの θ 機能を持つことしか許されない。しかし、例外的に複数の θ 機能を付与されるチェーンがある。Chomsky はこれを、複合チェーン (Composed Chain) と呼んだ。

- (28) 複合チェーン：もし $C=(\alpha_1 \dots \alpha_n)$ が真性空範疇 (Real Gap) のチェーンで、 $C'=(\beta_1 \dots \beta_n)$ が寄生空範疇 (Parasitic Gap) のチェーンであった場合、 (C, C') は複合チェーンである。(Chomsky 1986b, p. 63 より)

寄生空範疇とは、空操作子“O”の移動に際して生ずる痕跡を指す。我々はここで、複合チェーンを Chomsky (1986b, p. 75) の言う拡大チェーン (Extended Chain) の一種と考え、それぞれを次のように定義したい。

- (29) a. $(\alpha_1 \dots \alpha_m)$ と $(\beta_1 \dots \beta_n)$ とが同一指標を持ち、しかも β_1 が α_i ($1 \leq i \leq m$) によって先行詞統率されている場合、 $(\alpha_1 \dots \alpha_m, \beta_1 \dots \beta_n)$ は拡大チェーンである。

- b. 拡大チェーンは、 θ 基準の要求により、複数の θ 機能を付与されてはならない。但し、 β_1 が照応表現 (anaphora) である場合には、この限りではない。また、 β_1 が照応表現である場合、その拡大チェーンを複合チェーンと呼ぶ。

(29a) は、拡大チェーンもまた、先行詞統率によって結ばれていなければならないことを規定している。従って、ECP は次のように再定義される。

- (30) ECP: すべてのチェーンは、先行詞統率によって結合していなければならない。

寄生空範疇が複合チェーンを形成するのは、空操作子 “O” が照応表現であるためだと考えられる。つまり “O” は、作用域特性 (Scopal Property) の要求により CP 指定部に移動されていなければならないという点で WH 句に似ており、「空操作子」と呼ばれるわけだが、複合チェーンを形成するという点で照応表現に似ており、「空照応表現」と呼ばれうる一面をも有しているのである。

“O” の形成する寄生空範疇のチェーンは、所謂 *too...to* 構文、関係節、PP 補部節等に現れる。

- (31) a. the men_i are too stubborn [_{CP} O_i [_{IP} PRO to talk to t_i]]
 (その人達はひどく片意地なので、話しかけることができない。)
- b. the book_i [_{CP} O_i [_{IP} I read t_i]]
 (私の読んだ本)
- c. What_i did you [_{VP} file t_i [_{PP} before [_{CP} O_i [_{IP} you read t_i]]]]
 (君が、読む前にファイルしたのは何か?)

(31a) は Chomsky (1982, p. 31) からの、(31c) は Chomsky (1986b, p. 64) からの引用である。それぞれ、下線部が “O” の先行詞 (29a でいう α_i) に相当する。まず、(31b) から見てみよう。この文では、関係節 CP が “O” の最小 θ 領域になるが (17 参照)、この CP を支配もしくは被覆すると同時に the book を除外するような結節点は、存在しない。従って、“O” は先行詞統率を受け、ECP を満たす。また (31c) では、CP が

P の項であり、しかも PP が V の項ではないため、“O” の最小 θ 領域は PP になる。その PP を支配もしくは被覆し、先行詞 t_i を除外するような結節点は存在しない。故に、(31c) もまた ECP を満たす。(31a) は問題の残るケースであるが、ここで結果節 CP が IP の付加要素であると仮定しよう。この場合、“O” の最小 θ 領域である結果節 CP を支配もしくは被覆し、しかも母句 IP 指定部の the men を除外するような結節点は存在しない。加えて、the men を支配する最大投射要素はすべて“O”をも支配するから(注4の定義によれば、母句 IP が“O”を支配することになるという点に注意)、the men は“O”を M 統御する。従って“O”は先行詞統率を受け、拡大チェーンが形成される。次は(31a)の S 構造である¹¹⁾。

(32) [_{IP} [_{IP} the men_i are too stubborn] [_{CP} O_i [_{IP} PRO to talk to t_i]]]

2.1 以上のように、空操作子“O”は常に先行詞統率を受け、複合チェーンを形成する。そのため、“O”の現れうる位置はかなり限られたものになるわけであるが、同様に他の照応表現も、その分布が著しく制限されている。そこで我々は、次のように仮定しておこう。

(33) すべての照応表現は、LF において複合チェーンを形成しなければならぬ。

更に、照応表現を含むすべての代用表現が、LF への写像において移動変形の対象になるものと仮定する。次の(34)(35)を例にとって、この問題について考えてみよう。(35)は、(34)各文の LF である。下線を施した要素が、同一の指標を与えられている。

- (34) a. As I have loved you, so you must love one another.
 (私があなた方を愛したように、そのようにあなた方も互いに愛し合いなさい。)
- b. They like the pictures of each other.
 (彼等は、互いの写真が好きだ。)
- c. We like each other's books.
 (我々は互いの本が好きだ。)

- d. The men expect each other to win.
 (その人達は、互いが勝つことを期待している。)
- e. *They like my pictures of each other.
 (彼等は私の撮った互いの写真が好きだ。)
- f. *The men expect me to respect each other.
 (その人達は私に、互いを尊敬することを期待している。)
- g. *The men expect that each other will win.
 (その人達は、互いが勝つことを期待している。)

- (35) a. . . .you must [_{VP} one another [_{VP} love t]]
 b. they [_{VP} each other [_{VP} like [_{NP} t₁ [_{N_i} the pictures t₀]]]]¹²⁾
 c. we [_{VP} each other [_{VP} like [_{NP} t [_{N_i} books]]]]
 d. the men [_{VP} each other [_{VP} expect [_{IP} t [_{I_i} to win]]]]
 e. they [_{VP} like [_{NP} my [_{N_i} pictures of each other]]]
 f. the men [_{VP} expect [_{IP} me to [_{VP} each other [_{VP} respect t]]]]
 g. the men [_{VP} expect [_{CP} that [_{IP} each other [_{IP} t will win]]]]

a—d の照応表現は、最終的にはいずれも母句 VP に付加されており、母句 IP がその最小 θ 領域になっている。従って、母句 IP 指定部の先行詞によって統率される。この中で、d は注意を必要とする。母句 V の expect が CP 削除を行う動詞であるため、子句 IP が母句 V の項になっているのである。このため、子句 IP 指定部内の痕跡にとつての最小 θ 領域は、母句 VP になる。その母句 VP に付加された each other と、痕跡との間に、当然障壁は存在しない。これに対して f では、子句 VP に付加された each other を、母句 VP に付加する術がない (each other にとつての最小 θ 領域は、子句 I¹ である。従つてもし直接母句 VP に付加すれば、母句 V¹、子句 IP が先行詞統率を阻む障壁になる。また、子句 IP への付加は、19b によって不可能である)。また e では、NP 指定部が my によって既に満たされているため、b とは違って NP 指定部への代入ができない。直接母句 VP に付加しても、NP、V¹ が障壁になるので、痕跡が先行詞統率されず非文となる。g では子句 IP 指定部内の each

other が、いったん IP に付加されている。しかし子句が定形節であるため、CP の削除が行われない。従ってこの場合も、each other を母句 VP に付加することができない (IP に付加された each other にとって、C¹ が最小 θ 領域になる。従ってもし直接母句 VP に付加すれば、子句 CP、母句 V¹ が障壁になる。また、WH 句や “O” と違って CP 指定部への代入は認められないし、CP への付加も 19b によって排除される)。

ここで我々は、大きな可能性が示唆されていることに気付くのである。近年の生成文法では、束縛理論と ECP とを統合しようとする動きが目立つ。例えば Aoun (1985) は一般束縛原理 (Generalized Binding Principles) によって、また部分的にはあるが May (1985) は経路包含条件 (Path Containment Condition) によって、両者の統合を試みた。そして我々は今、従来束縛原理 A (Binding Principle A) によって説明されていた文法現象が、多くの場合「統率」「障壁」といった概念により説明可能であることを見た。つまり「障壁」という概念は、統率理論と境界理論とを統合するばかりでなく、束縛理論をも統合する可能性を秘めているのである。次に、代名詞について見てみよう。代名詞の分布は、従来束縛原理 B (Binding Principle B) によって説明されていた。

(36) a. John saw my picture of him.

(ジョンは私の撮った彼 [=ジョン] の写真を見た。)

b. *John saw a picture of him.

(ジョンは彼 [=ジョン] の写真を見た。)

c. John read his book.

(ジョンは彼 [=ジョン] の本を読んだ。)

束縛原理 B で上の各文を説明しようとする場合、問題になるのは (36c) である。この文では、IP が his の統率範疇 (Governing Category) になっているから、代名詞が先行詞 John による局所 A 束縛 (Local A-Binding) を受けるはずである。従って、束縛原理 B は、事実的に反して (36c) が非文であることを予測してしまう。しかし我々の枠組みによれば、こうした矛盾は起こらない。次は (36) 各文の LF である。

- (37) a. John saw [_{NP} my [_{N_i} picture of him]]
 b. John [_{VP} him [_{VP} saw [_{NP} t_i [_{N_i} a picture t₀]]]]
 c. John [_{VP} his [_{VP} read [_{NP} t [_{N_i} book]]]]]

(37b, c) では、代名詞が VP に付加されており、先行詞 John によって先行詞統率を受け、拡大チェーンを形成している。これに対して (37a) では、NP 指定部が my によって満たされているために、代名詞を NP から摘出することができず、拡大チェーンも形成されていない。もっとも代名詞は、照応表現と違って先行詞統率を受けることを条件とはされないのので、(37a) は合法文となる。一方 (37b, c) で移動されている代名詞は、(29b) である β_1 に相当する。従ってこの場合、 θ 基準の要求により代名詞が独自の θ 機能を持つことは許されない。にも関わらず、(37b) では代名詞が θ 位置 (NP 補部) から移動されている。この θ 基準の違反が、(37b) を非文にしているのである。そして、非 θ 位置から代名詞を移動した (37c) は、容認される。

こう考えてみると、GB 理論において束縛原理 B の帰結として説明されていた文法現象も、多くの場合我々の枠組みの中で説明できそうである¹³⁾。この成果をもとに、更に中国語の例についても考えてみよう。

2.2 田島 (1987, 第三章) では、次のような文が検討された。下線は同一指標の要素を、また角括弧は照応表現や代名詞の統率範疇を表す。

- (38) a. [_{IP} 張三 好象 討厭 他 自己]
 [_{IP} 張三 好象 討厭 伊 自家] <S>
 (張三は自分 [= 張三] を嫌っているようだ。)
 b. * [_{IP} 張三 好象 討厭 他]
 * [_{IP} 張三 好象 討厭 伊] <S>
 (張三は彼 [= 張三] を嫌っているようだ。)
 c. [_{IP} 張三 和 李四 平常 贊揚 彼此 的 善行]
 [_{IP} 張三 脫 李四 平常 贊揚 彼此 個 善行] <S>
 (張三と李四は、日頃互い [= 張三と李四] の善行を褒め合っている。)

- d. [_{IP} 張三好象討厭他的朋友]
 [_{IP} 張三好象討厭伊個朋友] <S>
 (張三は彼 [=張三]の友人を嫌っているようだ。)
- e. 張三才明白了 [_{IP} 李四討厭他自己]
 張三真真明白勒 [_{IP} 李四討厭伊自家] <S>
 (張三は、李四が自分 [=張三]を嫌っているとやっとなつて気付いた。)
- f. 張三才明白了 [_{IP} 李四討厭他]
 張三真真明白勒 [_{IP} 李四討厭伊] <S>
 (張三は李四が彼 [=張三]を嫌っているとやっとなつて気付いた。)

このうち、(38a, c) は、束縛原理 A の規定通り統率範疇内で照応表現が束縛されているので、問題なく容認される。また (38f) は、代名詞が統率範疇内で自由 (free) なので束縛原理 B を満たすが、(38b) は、代名詞が局所 A 束縛されているため非文とされる。問題になるのは、(38d, e) である。まず (38d) であるが、代名詞他 / 伊 (he) の統率範疇は IP になる (他 / 伊にとって接近可能な主語は張三である) ので、束縛原理 B は事実上反してこの文が非文であることを予測してしまう。しかし我々の仮説によれば、(38d) の文法性を正しく予測できる。この文は、(36c) 同様代名詞が非 θ 位置に基底生成されているために、LF で拡大チェーンを形成しても θ 基準に違反しないのである。一方 (38b) のように、 θ 位置に基底生成された代名詞が、LF で拡大チェーンを形成するような文は、容認されない。次は、(38b, d) の LF である。

- (38') b. 張三好象 [_{VP} 他 [_{VP} 討厭 t]]
 張三好象 [_{VP} 伊 [_{VP} 討厭 t]] <S>
- d. 張三好象 [_{VP} 他 [_{VP} 討厭 [_{NP} t [_{N_i} 朋友]]]]
 張三好象 [_{VP} 伊 [_{VP} 討厭 [_{NP} t [_{N_i} 朋友]]]] <S>

(38a, c) の照応表現も、LF では先行詞統率を受け、拡大チェーン(複合チェーン)を形成する。よって (33) の条件を満たし、合法文とされているのである。

従って、問題として残るのは (38e, f) だけだということになる。(38e) は、照応表現他自己 / 伊自家 (himself) が統率範疇内で自由であるため、束縛原理 A により非文とされるべき例である。しかしこの文は、括弧内の解釈において容認される。かと言って、なんらかの理由で母句 IP が統率範疇になっていると考えることによって解決を図ろうとすれば、今度は束縛原理 B により、(38f) が非文であるとの予測が出てしまう。我々はこの矛盾を、どう考えるべきであろうか。あるいは Higginbotham (1985) の言うように、局所 A 束縛を条件に加えるか否かは、言語によって異なるのかもしれない。あるいはまた、普遍的な文法範疇として「照応表現」を設けること自体に、問題があるのかもしれない。しかしもしこの問題を我々の仮説の中で解決しようとするならば、我々は次のように考えるべきだろう。即ち、(38e) の文は一種の強調表現であって、照応表現の用法としては破格であると仮定するのである。事実インフォーマントの馬さんによれば、(38e) の文は、「張三は李四が自分 [= 李四] を嫌っているということにやっと気付いた。」と解釈するのが自然だ、とのことであった。所謂“Echo Question”では、WH 句にストレスを置くことで、本来なら統語的制約によって IP 前位置 (Pre-IP Position) に移動できないような WH 句でも、LF で IP 前位置に移動することができる (May 1985, p. 61 参照)。同様に、(38f) の照応表現にもストレスが置かれ、本来容認されないような解釈が可能になっているのだろう。

3.0 最後に、PRO についてひとことふれておこう。以上の仮説に基づいて束縛原理 A・B を削除した場合、PRO の分布をどう説明するかという問題が残る。なぜなら Chomsky (1981) では、PRO は束縛原理 A・B 両者の対象になるため、統率子が一切存在しない位置にしか現れないと主張されていたからである。まず、英語における PRO の分布について考えてみよう。英語の PRO は、次の α の位置にしか現れない。

(39) ...V... [_{CP} e [_{IP} α [_{I_i} to VP]]]

つまり子句 IP 指定部の位置で、しかも ① 母句 V による CP 削除が

行われぬ、② C が空である、③ I が [-Tense] である、という条件がつく。ここで少し、見方を変えてみよう。まず、 α の位置にしか現れないということは、PRO が決して格 (Case) を付与されない要素であるということになる。第二に、決して移動変形の対象にはならないということが言える。 α の最小 θ 領域は IP であるため、いかようにしても PRO を CP の外へ出すことはできない (CP 指定部への代入は、WH 句や“O”でなければできない。また CP は項であるから、CP への付加もできない)。となれば、当然 PRO が先行詞統率を受けることはない。そこで、次のような仮説をたててみよう。

(40) PRO は空代名詞 (Empty Pronoun) である。

もし PRO が照応表現であれば、(33) の条件に違反することになってしまう。従って、代名詞と考えるのが妥当であるように思われる。逆を言えば、代名詞だからこそ先行詞統率が不可能な位置に現れるのであろう。もし先行詞統率を受ければ、 θ 基準違反が起きてしまう (PRO が VP によって既に θ 機能を受けている点に注意)。また PRO は、統語構造上の空隙を埋める働きをしているとも言える。もし α の位置に音声形式を持った要素が現れば、格フィルター (Case Filter) 違反で非文になる。また“O”は、名詞性の WH 句同様、格の付与される位置にしか基底生成されない。結局 α の位置に基底生成されうる要素は、PRO を置いて他ないのである。

中国語にも、 α に相当する統語環境が一つだけ存在する。それは、修飾要素を伴う NP の主要部である。

- (41) a. 這本書是 [_{NP} [_{CP} 我昨天買的] PRO]]
 這本書是 [_{NP} [_{CP} 我昨日買個] PRO]] <S>
 (この本は、私が昨日買ったものだ。)
- b. 給我 [_{NP} 一本 [_{N_i} PRO]]
 撥我 [_{NP} 一本 [_{N_i} PRO]] <S>
 (一冊下さい。)

NP が修飾要素を伴っている場合、格はあくまでも NP に与えられ、

主要部 N に与えられることはない。しかも、N が移動変形の対象になることはありえない（主要部移動が可能な位置は VP 主要部に限られるが、V が空であるということはない）。(41) のように、中国語では関係節や数量結構だけで NP を形成しているかのように見える例があるが、この場合主要部は PRO であると考えられる。

駆け足になった嫌いはあるが、以上の考察から、中国語の NP 構造がおぼろげながら浮彫りにされてきたように思う。その成果を、次にまとめてみよう。

(42) $[_{NP} \alpha [_{NP} \beta [_{N_i} \gamma [_{N} \delta]]]]$

α (NP の付加要素) . . . 関係節 CP

β (NP の指定部) . . . 指示詞, 数詞, 量詞, 主語 NP

γ (NP の補部) . . . 関係節 CP

δ (NP の主要部) . . . 一般名詞, 名前, 代名詞, PRO 等

但し、 δ が名前や代名詞である場合、 β, γ は空である。また、 δ が PRO である場合、 α, β, γ がすべて空であってはならない。

本稿では、固有障壁を設けずに、最小条件だけで障壁を規定した。また、項の中間痕跡が γ マーク後消去されるという最近の Chomsky の主張も、受け入れなかった。こうした仮定のもとでは、英語の「that—痕跡効果」をどう説明するか、C に上昇した I が CP 指定部内の WH 句にとって必ずしも障壁にならないのはどうしてか、などといった問題が残る。こうした問題については、私なりに回答を用意しているつもりだが、残念ながら紙面の都合上、ここで詳しく述べる余裕はない。稿を改めて、論じてみたいと思っている。

[註]

- 1) X ̄理論には、いくつかのヴァリエーションがある(例えば、Jackendoff (1977) や Emonds (1985) は、V に三次投射を認めている)。本稿で採用する X ̄理論は、原則的に最近の Chomsky の考え方に依拠している。
- 2) 中国語において、各語彙範疇が平行的な X ̄構造を持たないのは、形態的特徴の貧弱さも一因になっているのではないかと考えられる。反対が「反対」という名詞としても、「反対する」という動詞としても用いられるように、中

国語の動詞は、対応する名詞と全く同一の音声形式を持っていることが少なくない。従って、各語彙範疇が平行的な X バー構造を持っていたと仮定した場合、ある句が名詞句なのか動詞句なのか判別しにくくなる事態も予想される。

- 3) 中国語の資料は、田島(1987)執筆の際、下記のお二人に提供していただいたものを利用する。お二人の献身的なご協力に、再度心から謝意を表したい。

北方方言：鄭迪(1956年北京市生まれ、男性)

上海方言：馬逸君(1963年上海市生まれ、女性)

- 4) 「除外」「M 統御」については Chomsky (1986b) の定義に従うが、「支配」については次の定義を採用する。

☆支配： α が β を除外せず、被覆 (cover) もしない場合、 α は β を支配する。(注... β が α の付加要素である時、「 α は β を被覆する」という。)

- 5) 例文末の〈B〉は北方方言を、〈S〉は上海方言を表す。
6) しかし、この仮定には独立の根拠がなく、いささかアド・ホックなものとなっている。今後の研究がまたれる課題である。
7) 以下、特に必要のない限り、中間痕跡を逐一書き出さないことにする。
8) あるいは、「いったん WH 句を CP に付加すれば、摘出可能になるではないか」という反論が出るかもしれない。しかし、英語の WH 句のような要素を、IP や CP に付加することはできない。その理由をここで詳述する余裕はないが、いずれ別稿にて論じてみたいと思っている。
9) 下接の条件とは、一度に二つ以上の境界結節点 (Bounding Node) を越える移動を禁じた条件である。境界結節点には S'(=CP), NP があり、言語によっては更に S(=IP) もこれに付け加えられる。
10) 特に必要を認めない限り、(21) のような構造表記の中に、X¹ レヴェルの角括弧を記すことはしない。
11) 一方、Chomsky (1986b) によれば、次の例文は非文になる。

☆who₁ [_{IP}t₁ [_{VP}spoke to you [_{CP}O₁ [_{IP}you met t₁]]]]

(君が会う前に、君に話しかけてきたのは誰か?)

Chomsky は、この文と (34c) との文法性の違いを下接の条件によって説明しようとしたが、本稿の枠組みでは、ECP 違反として上の文を排除することができる(“O”は照応表現であり、常に複合チェーンを形成する。しかしここで“O”は、先行詞である母句 IP 指定部の痕跡に統率されていない)。

- 12) 本稿では、定不定を問わず冠詞を NP 指定部とは考えないことにする。
13) θ 基準による代名詞の分布の制限というこの考え方は、cross-over 現象の説明にも有効である。一般に「弱い」cross-over は、「強い」cross-over に比べて容認性が高い。これは、「強い」cross-over を起こす代名詞が IP 指定部 (θ 位置)にあるのに対して、「弱い」cross-over を起こす代名詞が NP 指定部 (非 θ 位置)にあるためではないかと考えられる。

(補註) 本稿を起すにあたって、言語文化研究所教授川本邦衛先生、同西山佑司先生から、多くの示唆に富んだご意見をいただいた。記して謝意を表し

たい。

参考文献

- Aoun, J. (1985). *A Grammar of Anaphora*. (The MIT Press.).
- Chomsky, N. (1965). *Aspects of the Theory of Syntax*. (和訳版『文法理論の諸相』, 安井稔訳, 研究社——を用いた)。
- (1972). *Studies on Semantics in Generative Grammar*. (和訳版『生成文法の意味論的研究』, 安井稔訳, 研究社——を用いた)。
- (1977). *On Wh-Movement*. (Culicover, P. Wasow, T, and Akmajian, A. eds. "Formal Syntax." Academic Press. pp. 71-132).
- (1981). *Lectures on Government and Binding*. (Foris Publications.).
- (1982). *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding*. (The MIT Press.).
- (1986a). *Knowledge of Language*. (Praeger Publishers.).
- (1986b). *Barriers*. (The MIT Press.).
- Emonds, J. E. (1985). *A United Theory of Syntactic Categories*. (For is Publications.).
- Hashimoto, A, Y. (1971). *Mandarin Syntactic Structures*. (和訳版『中国語の文法構造』, 中川・木村訳, 白帝社——を用いた)。
- Higginbotham, J. (1985). *On Semantics*. (Linguistic Inquiry 16. pp. 547-593.).
- Huang, C, T, J. (1982). *Move Wh in a Language without Wh Movement*. (The Linguistic Review 1. pp. 369-416.).
- (1983). *A Note on the Binding Theory*. (Linguistic Inquiry 14. pp. 554-561.).
- Jackendoff, R. (1977). *X̄ Syntax*. (The MIT Press.).
- Li, C. and Thompson, S. (1981). *Mandarin Chinese*. (University of California Press.).
- 呂叔湘等. (1981). *現代漢語八百詞*. (商務印書館)。
- May, R. (1985). *Logical Form*. (The MIT Press.).
- 中島平三. (1987). *Barrier 理論の新展望*. (英語青年 133. pp. 65-67, 117-119.).
- Radford, A. (1981). *Transformational Syntax*. (Cambridge University Press.).
- 田島英一. (1987). *統語構造から見た中国語疑問代詞*. (1986年度慶応義塾大学修士論文)。
- 湯廷池. (1982). *国語変形語法研究, 第一集「移位変形」*. (学生書局)。
- (1984). *国語里「移動 α」的邏輯形式規律*. (教学与研究 6, pp. 79-114.).
- Xu, L, J. (1986). *Free Empty Category*. (Linguistic Inquiry 17. pp. 75-93.).
- 安井稔等. (1983). *意味論*. (大修館書店)。